増上寺徳川家霊廟の風景（１）

芝増上寺に有った徳川家霊廟は昭和２０年５月の空襲で焼失するまで、荘厳な霊廟空間を保ち続けてきた。霊廟建築の粋を集めた御霊屋、勅額門、二天門、霊牌所等の建物は貴重な文化財として国宝、重要文化財に指定され、明治以来様々な形で写真映像が残されてきた。

『東京国立博物館所蔵　幕末明治期写真資料目録１－図版篇－』『鹿鳴館秘蔵写真帳』『Ｆ．ベアド幕末写真集』『東京府史蹟保存物調査報告書　第１１冊』『国宝建造物第１期』等々、そしてＷＥＢに公開されている『長崎大学付属図書館　幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース』に残された写真資料は、重複資料を含みながらも在りし日の増上寺の霊廟空間を隅々まで私達に伝え残してくれている。

ただ残念なのは写真に付されたキャプションが正確でないのと、キャプションそのものが付けられていないために、霊廟空間のどの部分を写した物なのか判然としないものが多く含まれている。今回、私はこれらの写真集の内容を整理しながら増上寺徳川家霊廟の全体像を復元し、不詳であった写真の場所を特定する作業を行っていきたいと思う。

１．南霊屋

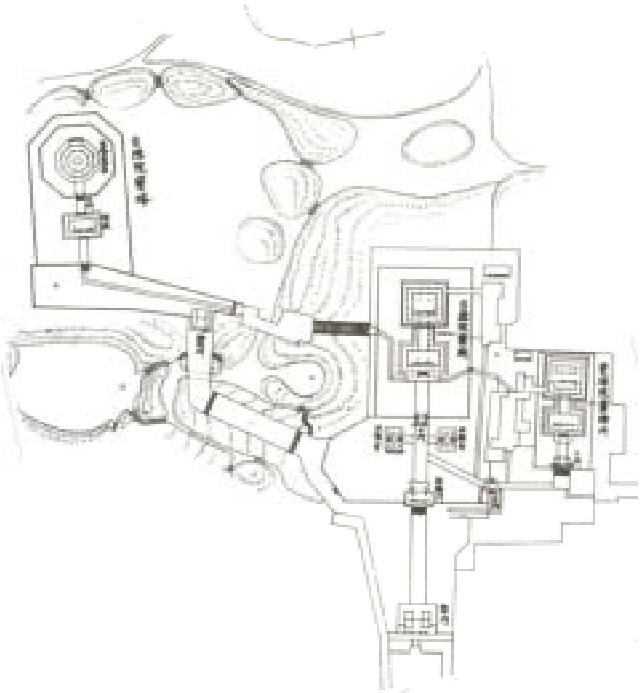

図１

増上寺は本堂を夾んで南北に墓所域が拡がる。増上寺の全体像を示す資料は絵図の形で多く残されているが、写真資料としては昭和２２年８月と１１月に米軍が撮影した航空写真が残されているに過ぎない。これらの航空写真は現在国土地理院のＷＥＢによって閲覧が可能であるから一度見てみることをお薦めする。（http://mapbrowse.gsi.go.jp/airphoto/indexmap_japan.html）筆者は８月１日撮影の高度 1524 ｍからの画像データを購入して拡大して使用しているが、かなり大きく引き延ばしても画像の精度は落ちない。各霊廟域に残された灯籠の姿まで判然と確認できる。

南霊廟には崇源院霊牌所と台徳院霊廟それに台徳院奥院が存在する。奥院は丸山の地の一画に抱かれるように配置されているので、全体の情景を概観した写真は無いようである。

台徳院御霊廟奥院外観

まず奥院についてその全体像を把握してみよう、

台徳院奥院は拝殿、中門、八角形の宝塔覆屋からなる。実はこの奥院を拝殿の正面から撮影した映像資料が無いので、全体を詳細に見ることは出来ないのだが幸いにも文化財調査の報告が複数残されていて、数値的なデータとして辿る事が出来る。

その中から、文化財保護委員会が昭和４０年に刊行した『戦災等による焼失文化財建造物（霊廟。東照宮）篇』の記述を拾って見ることにする。

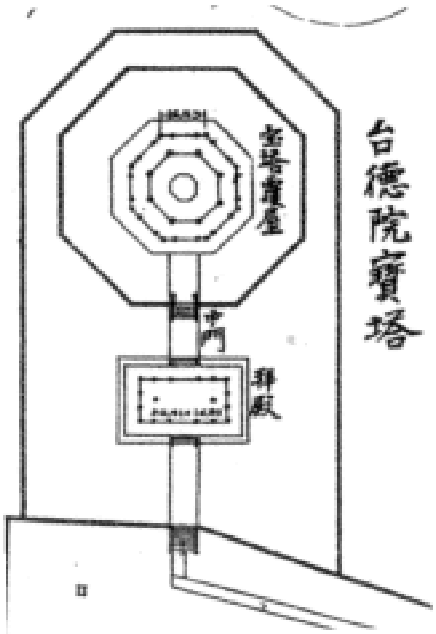

図２

奥院宝塔の覆堂は八角の重層、すなわち一重裳階附である。周囲見切石以内を四半石敷をし、各柱下には礎石、礎盤を石で造る。裳階は各面を、三間に分ち、柱は八帳面取八角柱、上下粽附で、石土台、地貫、腰貫、内法貫、頭貫入れ、台輪を置き、三斗組を組んで二軒繁垂木の軒を受ける。屋根は八面葺きおろしで、身舎頭貫下に取り付く。身舎の柱は円柱、頭貫、台輪、三手先詰組、二軒扇垂木、屋根八注、銅瓦葺である。各面三間のうち中央間の柱間装置は、後隅面だけ板壁で、他は全部桟唐戸を開く。両脇間は各面板壁で、丸窓が付いている。
内部は 四半石敷で、身舎部だけ一段高く、その中央に宝塔が置かれている。身舎柱と裳階柱とは各貫と虹梁で結ばれ、天井は身舎が小組格天井、中央部八角折上げ、円形鏡天井となり、裳階部は化粧屋根裏になつている。装飾の漆、彩色は例の通りである。

こういった記述は、実物を見乍らだと分かり易いのだが、字面を追っていっても中々イメージしづらい物がある。皮肉な話だが戦後の墓所解体時の写真が奥院の基礎部分の状態を分かり易く示してくれているので次に掲げておこう。この写真は昭和３３年から３５年にかけて徳川家墓

写真１『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』より

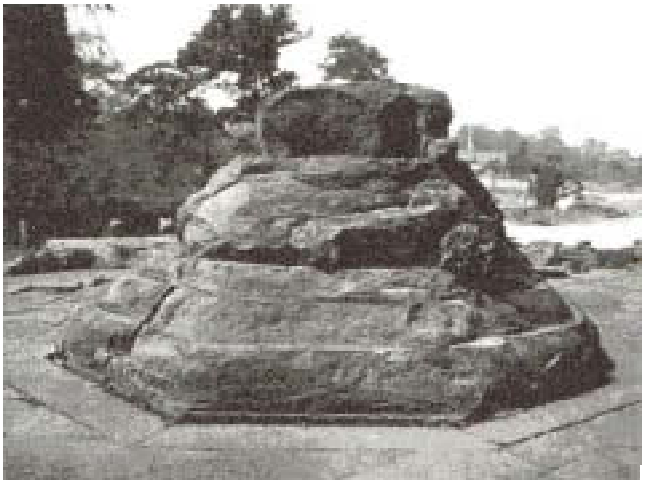

写真２『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』より

所の整備と改葬作業に伴って行われた文化財保護委員会の学術調査の報告書『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』と鈴木尚『骨は語る徳川将軍・大名家の人びと』（共に東京大学出版会）の中の写真である。

幸いにも人物写真まで配されていて、敷地の規模を十分に推測できる。左側写真中央の宝塔台座の部分が右の写真である。台徳院徳川秀忠の柩はこの宝塔台座の下の部分に埋葬されていてその解体の写真は上記資料に収められているので興味のある方は参考にされたい。

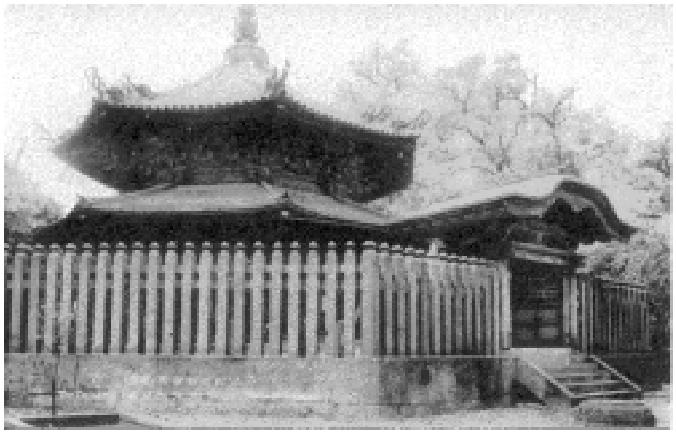

写真３『増上寺絵葉書』増上寺霊廟事務局（筆者蔵）

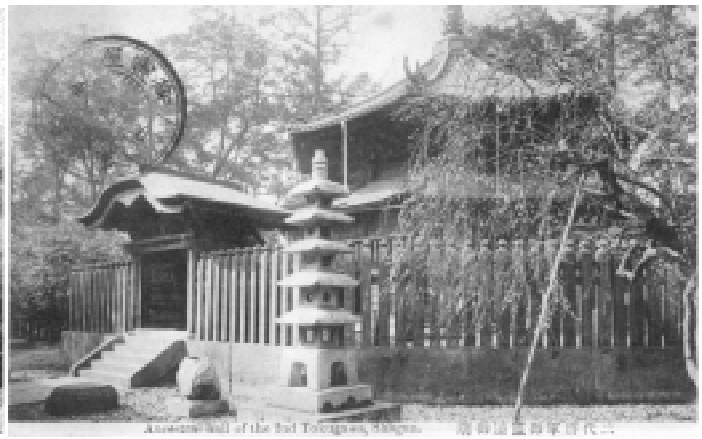

写真４『増上寺絵葉書』増上寺霊廟事務局（筆者蔵）

写真に戻ろう。左写真中央の八角形の部分が宝塔覆屋で『戦災等による焼失文化財』に有るように内部は 四半石敷で、身舎部だけ一段高く、その中央に宝塔が置かれている。

八角形の石敷きの部分から左下に伸びている石敷き部分の境目に中門が有る。中門手前には石階が有りその手前に拝殿が建っていることになる。

中門、覆屋を正面左右のアングルから写した写真を上に掲げる。どちらも増上寺霊廟事務局が出した絵葉書の写真で、写真４には「御霊屋／４．８．６／事務局」のスタンプが押されている。古書店から購入した時点で７葉の写真があり、いずれにもこのスタンプが有るので昭和４年８月６日に購入者が増上寺で捺印したものと思われる。

写真５　狭山山不動寺外構写真

写真６　狭山山不動寺外構写真

写真３と同じアングルの写真は『戦災等による焼失文化財』『東京府史蹟保存物調査報告書第 11 集』にも見えるが何れも拝殿の部分が欠けており拝殿を含めて全体像を掲げている写真は少ない。

まず中門からの宝塔覆屋を巡らしている特徴的な玉垣に注目してみたい。

『戦災等による焼失文化財』には

奥院玉垣は、中門から起り覆屋周囲を八角形に一周する石柵である。石柵は角柱で上部を金剛柵形にする。柵を繋ぐ連絡には二段の貫があり、また内側には要所に控柱がある。

写真１では跡形も無い玉垣だが、実は撤去されてその一部が現存する。所沢の狭山山不動寺入り口左右の石柵がそれで、角柱で頭部は金剛柵形、貫も二段の石貫が用いられている。貴重な文化資料として大事に保存していただきたいと思う。

次に２葉の写真を紹介したい。中門を覆屋の側から撮った写真（写真７）と拝殿の外から拝殿の一部覆屋が見えるように撮影した写真である（写真８）。写真７では拝殿の屋根の一部が写っている。

写真７『戦災等による焼失文化財』

中門に関してはまず『戦災等による焼失文化財』から以下の記述を拾っておこう

奥院中門は唐破風造屋根をかける。屋根は銅板葺である。主柱間には蹴放、方立を入れ、薬座で桟唐戸を吊る。主柱控柱間の腰貫上には花狭間を入れ、また組物間や大瓶束脇には　網目文通彫を入れる。全体に漆塗としている。

写真３、４、７を見ながらこの記述を読むと、十分に内容が伝わってくる。写真の持つ力である。

拝殿に移る前にここで写真７に写り込んだ石の五重塔を紹介しよう。

まず一つの資料を掲げてみる。

『増上寺日鑑第１巻』「役所日鑑」安永４年３月１０日の条に

一、当九日、於牧野越中守殿御達有之候、御霊屋向へ諸士方ヨリ献上之建物之儀相糺書付差出、左之通、覚

一、安国殿　石鳥居　　壱基
　右松平筑後守殿献備、但年号難知、
一、台徳院様御霊屋　御水屋　　壱ケ所
　右寛永九年鍋嶋肥前守殿献備、
一、御同所　御水屋　　壱ケ所
　右寛永九年寺沢志摩守殿献備、但当時断絶ニ付、従公儀御修復
一、御同所御廟　五重塔
　右酒井雅樂頭殿献備、但最初献上之年月難相知、明和五子年雅樂頭殿ヨリ修復御座候、
一、御同所　石五重塔
　右承応年中永井信濃守殿献備、
一、御同所　来迎石
　右寛永十三年吉岡備前守殿献備、
一、御同所　涅槃石
　右寛永廿一年御彫物師吉岡備前介献備、
一、御同所　御手水石
　右寛永十年板倉周防守殿献備、

写真８『幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース』

寺社奉行であった牧野越中守貞長からの問い合わせに対して増上寺側が回答した文書だが、ほとんどが台徳院霊廟への献備品である。諸氏からの献備品は増上寺の徳川家霊廟全域を通じてこれだけであり、簡単に献納が出来なかったことが判る。

「覚」に見られるように増上寺には酒井雅樂頭が奉献した五重塔が丸山に建てられていたが、その他に永井信濃守が献備した小さな石造の五重塔が存在した。

写真８は長崎大学付属図書館のＷＥＢに紹介されている写真だが左端にわずかに先に紹介した覆屋の玉垣の部分が写り込んでいる。同じように写真６にはこの石塔の先端が写り込んでいる。二人の女性の前には小さな屋根の掛けられた水盤の様な石造物が見える。写真４と比べてみればこの写真が奥院拝殿を入った中門前右手から撮った物であることが判る。

写真の背後に石造の玉垣が見えるが、これは奥院全体を囲い込む形で巡らせた玉垣で『東京国立博物館所蔵　幕末明治期写真資料目録１』の中にも奥院拝殿外側左側からの石造玉垣を写したと思われる写真がある（写真９）。写真９を子細に見ると画面左下に甕の様な広口の石造物、その上に少し先端の尖った背の高い石造物が見える。写真１０、１１も同書に収められた石造物の写り込んだ写真でだが、実はこの３枚の写真は奥院拝殿前左手の一画を写した物であることが判る。

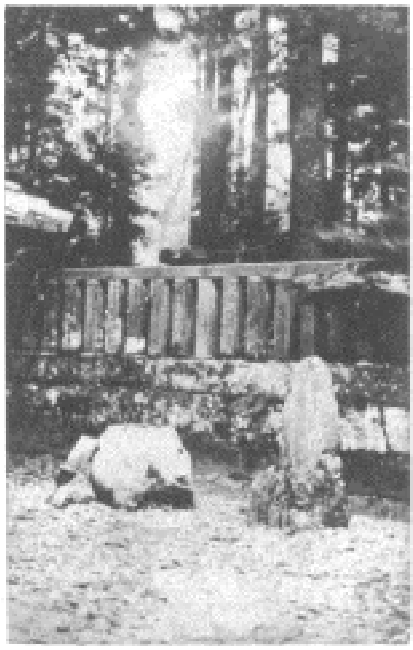

写真 10『幕末明治期写真資料目録１』

写真９『幕末明治期写真資料目録１』

写真 11『幕末明治期写真資料目録１』

図３を見て頂きたい。図３は九段下の佐竹家の資料館「千秋文庫」が所蔵する『享保年間による彩色大絵図』の奥院拝殿下の部分である。右上に見えるのが拝殿下の石階である。吉岡豊前の手になる涅槃石と菩薩石、永井尚政奉納の石の五重塔、それに観潮盥が見える。

図３『享保年間による彩色大絵図』（千秋文庫蔵）

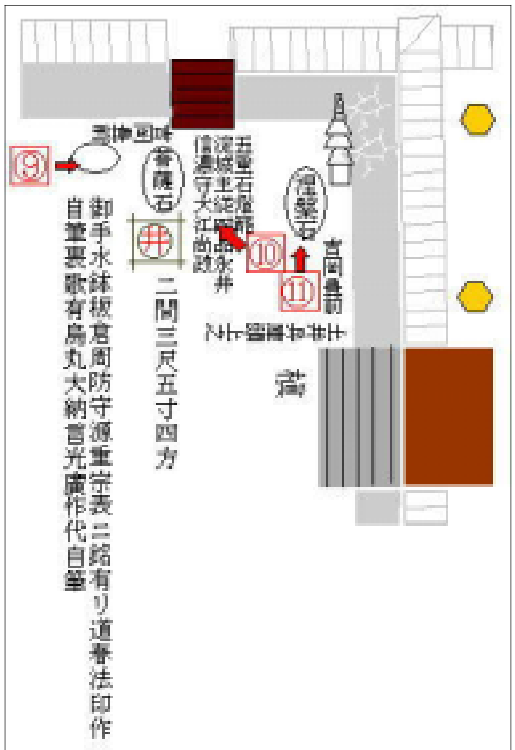

図４『享保年間による彩色大絵図』復刻図

図４は図３を元に書き直した物だが、図中には写真９、10、11 のカメラ位置を示した。当初写真９，11 の位置関係が明確ではなかったが、涅槃石の形状から写真９は涅槃石を側面から撮影したものと判断できた。

写真１０の左端に写る屋根は井戸の位置を示していると思われる。『千秋文庫絵図』では井戸は２間３尺四方とあるので大きな屋根の付いた井戸と考えられる

写真９，10、11 が『千秋文庫絵図』の石造物の位置を正確に写し出していることが判る。

さてここで写真７、８に戻って、この中に写り込んでいる石造五重塔を考えてみたい。

明らかに同じ観潮盥と石造五重塔が写っていると思われるのに、位置が全く変わっている。

もう一つ今回入手した御霊廟事務局の写真の中に写真 11 の涅槃石を写した物があるが、その位置は背後の玉垣の形状から考えて、奥院宝塔覆屋の前と考えられる。

つまり、観潮盥、石造五重塔それに涅槃石共に幕末・明治期の『幕末明治期写真資料目録１』が撮影された時期以降に、奥院拝殿前から中門の内部奥院宝塔覆屋前に移された物と考えられる。おそらく菩薩石も同時に移された物と思われる。このことは涅槃石、観潮盥下部の台座の形状からも充分に窺うことがことが出来る。

写真 12『増上寺絵葉書』
増上寺霊廟事務局（筆者蔵）

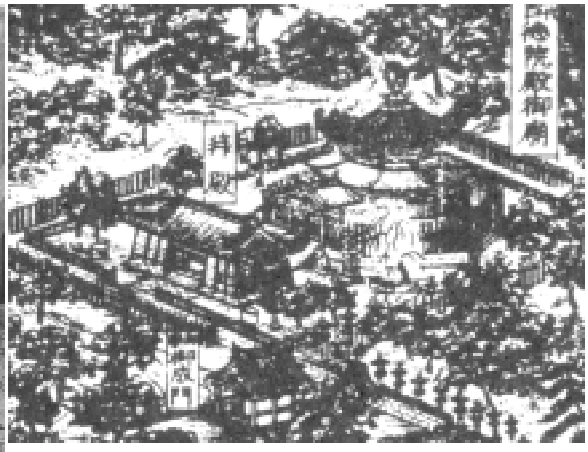

写真１３『大日本芝三縁山増上寺境内全図』（部分）

写真１４　写真１３の拡大

明治３４年１０月の『大日本芝三縁山増上寺境内全図』は増上寺の境内全域を俯瞰したものだが、その台徳院御霊廟の部分を拡大してみると、かなり精密に当時の状況が写し出されているのがわかる。拡大部分は、写真４をそのまま描き出している様に思われる。

次に明治３０年発行された『風俗画報臨時増刊』の「新選東京名所図会」を見てみよう。ここには当時どの様にこれらの石造物が配置されていたのかを見聞録風に記述している物があるので、見てみることとする。

まず増上寺内の墓碑類を列記した中に以下の記述がある。

涅槃石　台徳公の廟前右の方にあり。又羅漢石とも號す。寛永二十一年甲申正月二十四日御彫物師吉岡豊前介重継上七十三歳刻之とあり。青石の三尺ばかりなる立石に涅槃の像のさまを彫付たるなり。

曼荼羅石　又来迎石とも名く。涅槃石に隣りて建てたり。是も亦吉岡豊前が作にて。六十八歳の時の作なりと云ふ。

五重石塔　台徳院御廟の側にあり。

観潮盥　前の五重石塔の側にあり。

当時奥院の寺域には石造物としては以上の４つが確認されていたことがわかる。観潮盥だが別の場所に説明があって「本文に記せる観潮盥は。寛永年中板倉重宗の献せし所にして俗に汐干の御手水鉢といふ。高さ四尺餘あり。銘は左の如し。」と有るので『徳川実記』にある寛永十年正月の記述「京都所司代板倉周防守重宗より水盤を献ず」に該当する物であるし『千秋文庫絵図』に有る御手水鉢で有ることが判る。曼荼羅石は菩薩石の事であろう。五重の石塔に関しては注記がないが、永井尚政奉納の石の五重塔で有ることは間違いがない。

さて見聞録だが、台徳院「霊廟の左側に出て。南に折れ。石磴三十級を攀づ。導者鍵を手にして先導す。林間墓門あるを見る。乃ち磬折して進めは。柵門あり。放鑰して入る。是を塋域と為す。」とあり、奥院まで進んで「此の外五重の石塔観潮盥あり。墓堂は八角堂にして。内には御影石を敷けり。」として奥院内部の記述を終えた後、「観畢りて。導者其の扉を鎖鑰す。扉外鐫刻をせる二石あり。之を問へは即ち一を涅槃石（一名羅漢石）一を曼荼羅石（一名来迎石）といふ共に吉岡重継の刻する所なり。」

記述者が、増上寺の案内人に先導され、台徳院霊廟左手から石段を登り、二天門を脇に見ながら奥院に向かっている様子がよく分かる。五重の石塔、観潮盥は奥院の八角堂つまり覆屋の記述の直前に有って写真４，８の風景を伺わせる。さて石の配置だが、涅槃石、来迎石の２石が隣り合って配置されているという記事からすれば写真 12 の涅槃石の傍に曼荼羅石が有ったことがわかる。写真が無いのが残念である。具体的な配置として「台徳公の廟前右の方」とあるが、後半の記述の参観の流れから考えて、台徳院奥院正面から見て右手と考えて良いであろう。

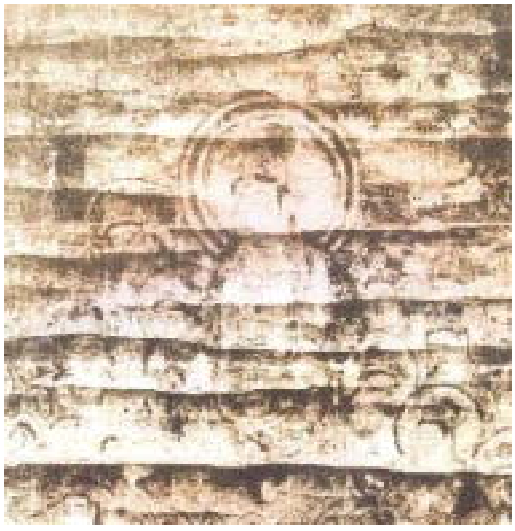

写真 15　当麻曼荼羅図

その二石を製作した彫工吉岡豊前介重継の子孫が幕府に提出した由緒書が紹介されているが、その中に「同（寛永）十三子年正月廿四日。台徳院様三回　御忌之節。御廟前え来迎石献備仕。同二十一申年正月廿四日。十三回　御忌之節。涅槃石献備仕。」の記述がある。

涅槃石に関しては、写真から細かい細工の様が窺われるが、残念ながら写真 10 の石碑が来迎石としても、写真からその細工の様を窺い知ることは出来ない。ただ『風俗画報臨時増刊』には来迎石は「二十五菩薩来迎の状を彫刻し。」とある。二十五菩薩来迎図としては知恩院に国宝に指定されている「早来迎図」が有るが、一名を曼荼羅石としていることから図柄的には当麻寺の国宝「当麻曼荼羅図」（写真 15）の様なものを想像した方が良いかも知れな

写真 16　涅槃石部分拡大図

写真 17　増上寺蔵『涅槃図』（増上寺 HP より）

い。

「来迎石」「涅槃石」「観潮盥」については摂門の『縁山志』の中にも記述があって、その中で「来迎石」の意匠については「弥陀の三尊廿五菩薩の来迎の粧を忽れる奇細天工にひとしく見るものの目を驚せり」とある。

さて「涅槃石」であるが『幕末明治期写真資料目録１』と同じ写真を掲げる『鹿鳴館秘蔵写真帳』の中では「彫刻石碑」として紹介されていたが、拡大してみると、明らかに釈迦の涅槃図が描かれているのが判る。ただここでは写真 12 から拡大写真を作ってみたのでそれを掲げておく。（写真 16）

増上寺のホームページには同寺所蔵の『涅槃図』の写真が載っているので、少し調べてみたが系統的には違う図柄で参照関係は無いように思われる。浅学を省みず少し注記してみたい。

涅槃図に関しては、中野玄三の『涅槃図』（日本の美術№. 268）に詳しい。画面中央に８本の沙羅双樹に囲まれて寝台が有り、釈迦は寝台上に右肱を手枕に横たわっている。寝台を囲むように弟子達が並び、石碑上部には月、画面右上には摩耶夫人が侍女を従えて飛来している。少し手前で先導する形になっている人物が阿那律がなのか、摩耶夫人なのかはこれ以上拡大しても摩耗していて判然としない。画面下には釈迦の死を悼む動物たちが寝台に向かって蹲っている。京都の興聖寺や禅林寺の涅槃図に見られる鎌倉時代以降の第二形式の諸特徴を持った図柄と言える。

最後に観潮盥に関しての摂門の『縁山志』の中記述を引いておこう

台廟御境内にあり寛永中板倉重宗献備銘あり（割注　此銘『羅山集』五十八に出す）

板倉侍従兼周防守源重宗得一奇石于洛涯欲備　大相國之　台覧事以聞乃使良工鑿開其石貯水以供頽濯附海運以達于江府來至會其薨逝噫見手澤而憶其親對磐石而念其祖見劍而思徐君覩堯于牆慕黄帝於鼎皆是其忠愛之心有之乎故今其石戴之鬱林之舟以至于此於是使余書其事因賦一章云爾

石磐盛水永湞湞盥漱況猶無垢湔恭敬中心堅不轉清

冷一掬獻　尊前

寛永十年正月廿四日　　道春拜書

裏に

侍従源重宗朝臣作代

権大納言藤原光廣

これにたにとはかり影をうつすやと

石間の水のあまりてそおもふ

『落葉集』云此御廟に汐干の御手水鉢といふありさして大なる石にてもなく高さ二三尺もありて横も其くらひなり日々干満あるよしなり板倉家より献備

『風俗画報臨時増刊』は明治３０年に発行されたのだから、幕末・明治初期からこの時期までに石造五重塔を始め「来迎石」「涅槃石」「観潮盥」は鍵の掛かる奥院宝塔覆屋の前に移されたことになる。

この時期増上寺境内は拝観料を取って一般に開放されていたし、丸山側からは容易に境内に入り込むことが出来たので、唐金燈籠等も盗難にあい小屋に取り片付けたりしている。おそらくそんな事情もあって場所の移動が行われたのであろう。

何れにしても「来迎石」「涅槃石」「観潮盥」「石造五重塔」ともにその後どの様な運命を辿ったのかは判っていない。写真１の人物の脇に見える石造物がそのどれかで有れば、どこかに運び出され残っている可能性もある。その為に特徴的な事項を列記しておいたので探索の手掛かりになればと思っている。

最後に拝殿について写真資料を見てみよう。拝殿に関しては全体像を写した物は見られないが、拝殿正面、拝殿内部、拝殿の切妻部の屋根を写した写真が『国宝建造物』の中に３葉収められているので、取り敢えず２葉紹介しておこう。

拝殿の全体像については『戦災等による焼失文化財』から記述を引いておこう。

「奥院拝殿は中門の的面にある。桁行五間、梁間三間で、四半石敷の上に礎石を置き、円柱（粽附）を立て、切目長押、半長押、内法長押を打ち、頭貫（鼻木鼻）を入れ、台輪を置く。組物は二手先で、中備に異形股を入れ、軒は二軒繁垂木、屋根入母屋造、銅板葺である。柱間は正背面中央聞か内法長押を高くし、双折枝桟唐戸を吊るばかは、全部蔀戸とする。縁は四周に廻り、唐様高欄を置く。内部は一室で、独立柱二本を立て、虹梁を見せるが、天井はその上に一面に張られ、小組格天井となる。この拝殿も内法長押上や組物間には彫刻を入れ、また全体に漆塗、彩色を施すこと、他の建物に等しい。」

拝殿に関して紹介できる記述は以上である。何故拝殿の全体像を捉える写真が無いのかは判らない。今後どこかのコレクションに有ることを期待したい。

写真 18『国宝建造物第 1 期』

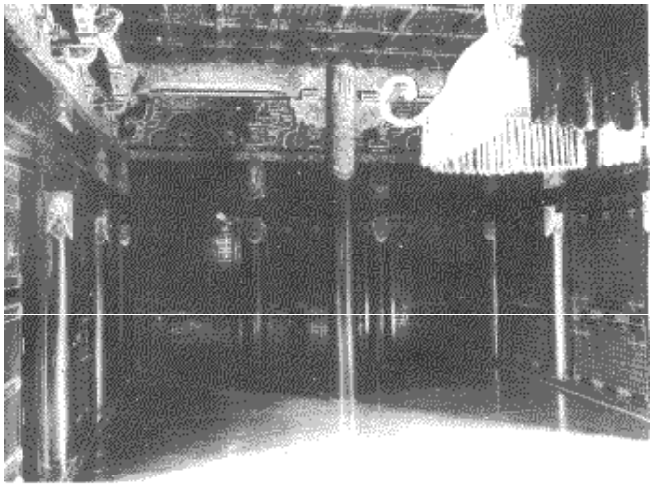

写真 19『国宝建造物第 1 期』

増上寺五重塔については「日本の塔婆」（http://www.d1.dion.ne.jp/~s_minaga/edo1.htm）の中に詳細な報告があるので、そこに譲ることにして若干の補足をしておきたい。五重塔は南霊屋一番南側の小高い丘に建っていた。芝東照宮裏手の芝公園内丸山古墳のあたりにあたる。酒井雅樂頭によって献備されたが後焼失。文化年間に再建されのち明和五年に雅樂頭により修復されたが戦災により焼失した。今回入手した増上寺御霊屋事務局の写真は今まで報告されていないので掲載しておく。

写真 20『増上寺絵葉書』増上寺霊廟事務局（筆者蔵）

写真 21 「東京市史稿　遊園編 7」